

補 章



1992年11月，休日の東京・銀座の歩行者天国で。日本人の洋装は生活の思想となった。（撮影：岩佐佳英）

日本人と洋装

——鹿鳴館から女がジーンズをはくまで——

大岩川 嫩

洋装化事始め

日本人が日常生活のなかで洋装を始めるようになってから、ほぼ一世紀を経た。欧米列強諸国をモデルにして、文明開化のスローガンのもと、文物の近代化を急いだ明治以後の日本ではあったが、一挙にすべてが変化したわけではない。なかでも、人々の生活の基本にかかわる衣服文化の変遷はとりわけ不均等に進行した。したがって、いまから百年前の一八九三（明治二十六）年頃には服装における性別、階層別の差異は顕著だった。すなわち、男性、なかでも官吏、実業界の高級事務職などは公用服装、外出着として洋服を着用していた。また軍人、警察官、鉄道員、郵便・邏卒、官立学校生などの職務や身分に応じた制服組も洋式の服装を義務づけられていた。しかし、女性一般や、男性でも商店員、職人等の民間人は和装ないし法被・半纏等の職種を示す仕事着姿が普通であった。

上からの服制改革

明治維新前後の時期に最も早く洋装が取り入れられたのは、戊辰戦争（一八六八年）における官軍の軍服であったことはよく知られている。し

宮 中 主 導 の
女 子 洋 装 化

こうして、「上からの」制度・風俗改革にいち早く順応したのが官吏・軍人を中心とする国家機関の担い手である男の世界であったのと対照的に、女の世界においては、一部上流階級や高等教育の場を除けば洋服は容易に

かし、明治初年の数年間は、政府当局からは間に合わせ的なばらばらの服装についての通達が主として宮中・政府への参賀、儀式などに際して発せられているにすぎない。この間、服制については政府部内でも守旧派改革派入り乱れて議論があつた模様である。やがて、明治四（一八七一）年九月四日、明治天皇から「風俗を一新」する旨の勅諭が出されるに及んで、洋式への服制改革の方向が明確になつた。勅諭の趣旨は、現在の衣冠の制は中古のころ唐を模倣したもので、「軟弱」であるから、「尚武の国体」を立てようとする現状にふさわしくない、というものであつた。そして、この趣旨を体しての公式な服飾制度は、翌明治五（一八七二）年十一月に発せられた官吏に対する大礼服・通常礼服の制によつてようやく定まつた観がある。この時、旧礼服として指定されていた直垂・上下・狩衣などの武家社会の伝統的な衣服を廃して、文武百官の大礼服を洋式正装とし、平安朝以来の衣冠は神事における祭服にのみ着用することを指定したのである。それから明治十（一八七七）年までの数年間に、陸軍武官服制（一八七三年）、神官・教導職・僧侶の礼服、巡査制服（一八七四年）、司法官制服（一八七五年）、等が順次定められて行つた。そして、それら官・社会指導層の服制がようやく定着してきた明治十年代後半に入ると、明治十五（一八八二）年に官立学校男子生徒に洋式制服が導入された（参考文献(1)）。

導入されなかった。

注目したいのは、男子校に三年遅れて同十八年には、東京女子師範本校の教員生徒が洋服を制服として採用、各県女子師範・高等師範もこれに倣ったことである。とき、あたかも不平等条約改正へ向けての西洋文明模倣を国家政策とする、欧化熱盛んな鹿鳴館時代でもあった。この女子師範における洋式制服制定について、大正・昭和期における社会運動家の山川菊栄の著に、その母で女子師範の第一回生であった青山千世の体験が、以下のように批判的に記述されている。

「明治十八（一八八五）年、宮中からの仰せ出されということ、今まで公式の服装には袴が用いられていたのを今後は洋装にすることになりました。その仰せ出されによると、わが国上古の女子の服装は衣と裳からなっていたのに、中古、唐の服装をまねて上から下までつづいた一枚のきものになった。しかるに今西洋文明国の婦人服を見ると、わが国上古のそれと同じく衣と裳からなっている。そこで宮中におかせられても、今後は再びわが国固有の服装に返って衣と裳を用いられることになった、というわけで、つまり復古に名をかりて実には西洋の服装をそのまままねることになったのです。これは条約改正のゆきなやみからきた洋服、洋館、洋食、ダンス、外国語の奨励、というふうに性急で皮相的な鹿鳴館的、貴族的欧化主義の公式の宣言でした。この年の夏休みには女子師範でも束髪の結いかた、洋服のぬい方の講習会を開くから出席するようにと卒業生へ通知があり……」（山川菊栄著『おんな二代の記』参考文献②）

洋装とヘアスタイルの束髪とがセットになっていたのもおもしろい。ただし、千世は、以来一度も日本髪に戻らず一生軽便な束髪で通したが、洋装のほうは当時のヴィクトリア風の窮屈なスタイルの不便さに、「まもなく少数の貴婦人以外にはすたれてしまいました」(同)とある。

初期洋装は

特権的な贅沢

しかし、女性層に洋装がなかなか普及しなかった理由は、右の事情と同時に、当時の洋服が極めて高価な贅沢であったことにもよる。当時正式に洋装を整えらるとなると、横浜の西洋人相手の店まで出掛けてあつらえなければならなかった。父がかつて現一橋大学の前身の商法講習所教師だったクララ・ホイットニー(後に海舟の息子の梶梅太郎と結婚)の日記によれば、明治十七(一九八四)年の初夏に、近く駐米特命全権公使として赴任する九鬼隆一の夫人の渡航準備をしてあげたという。

「私は先月、九鬼夫人に紹介された。特命全権公使の御主人と一緒にアメリカに行かれるの
 でお衣裳をすっかり見て上げるように頼まれた。……既に一回横浜に行つて来た。公使と二人の紳士と九鬼夫人と一緒に滑稽な時をすごした。価格の事等考えないで、左右手当り次第にあらゆる種類の美しい物、腕輪や宝石類に至るまであつらえるのは全く贅沢であった。」
 (『クララの明治日記』一八八四年七月項、参考文献③)

金額に制限なく高価な、おそらくは輸入品である洋装用の買い物できたのは、政府高官たる駐米特命全権公使の夫人なればこそであつて、父を異国で喪つて勝海舟の温情の庇護下に日本で生活を続けていた若いアメリカ婦人のクララ自身にとつても、許されない贅沢であつたに違い

ない。なお、こうして渡米した九鬼隆一夫人・波津は小柄ながら洋装を優雅に着こなし、ワシントン社交界での公使夫人としての評判は上々であつたらしい。

ついでながら、後述の平塚らいてう（明子、一八八六—一九七一年）の母・光沢も、明治二十一年頃に、欧州巡遊中の高級官吏の若い妻らしく洋装で英学塾に通い、二人の幼い娘にも洋服を着せて母子三人で撮つた写真がある。しかし、所詮は鹿鳴館時代の一時の仇花であつた。

これらの例でみるように、本格的な洋装は特権的上流階級のものであつた時代が、女性の場合にはかなり長く続いた。

「新しい女」も

二葉亭四迷の小説『浮雲』（一八八七年）のなかに出てくる当時の英学塾などで学んでいる「西洋主義」かぶれのお茶っぴい娘・お勢は、襦袢をシャツに変え、「唐人髷も束髪に化け、ハンカチで咽喉を締め……」という取り方であつたが、いざ団子坂の菊見に物見遊山となると、晴れ着にはやはり和装の着物しかないので焦れる。

まだ和服

「アアこんな時にア洋服があるといいのだけれどもナ……」。これに答える拝金主義の母親は、「働き者を亭主に持つて、洋服などんなと拵えてもらうのサ」——これが、明治二十年当時の都市中級生活者の一般の姿であつたらう。

いうまでもなく、女性一般にとつて洋装が仕事着・普段着の領域に進出してこようとは、明治時代を通じて考えられることではなかつた。ちなみに、『写真にみる日本洋装史』（参考文献⑤）

をみると、明治期の職業婦人は看護婦などを例外として、お針子、活字工、製本女工、電話交換手、医師など、ほとんどすべて和装であった。

試みに、女性の自立を目指して、日本におけるフェミニズム運動の先駆をなした女性たちの姿をみてみよう。明治も末年の四十四（一九一）年九月、平塚らいてうの創刊の辞「元始、女性は太陽であった」をもって、潜める「女性の天才」を発現するという目的を掲げて登場したのが女流文芸誌『青鞥』である。『青鞥』という誌名は、十九世紀前半にヨーロッパの文芸サロンに集う女性たちに対して半ば揶揄的に使われた呼称「ブルー・ストッキング」を逆手にとつての命名であったが、その同人たちの集まりの写真をみると、ストッキングはおろか、世に「新しい女」と呼ばれて注目された彼女たちの一人として洋装の人はいない。らいてうを初め、多くは着物に羽織、庇髪か束髪、中には岩野清子（岩野泡鳴夫人）のような丸髻姿もいる。

この傾向は、大正期に入っても続き、大正八（一九一九）年のらいてうらによる「男女の機会均等」の主張を綱領の第一条に掲げた「新婦人協会」設立のころにも同じであった。同年八月、名古屋新聞主催夏期婦人問題講習会の記念撮影写真をみると、女二〇人男八人のうち、女性はすべて和装、男性は洋服と和服が四対四となっている。

「仕事着」としての洋服登場

しかし、明治憲法下の法制上では無権利状態におかれていた女性一般の解放を求めて議会請願など東奔西走、活発な運動を展開し始めた平塚らいてうとその協力者・市川房枝の二人が、ついに服装を変えるときがきた。

「大正九年の七月……。真夏の酷暑の中を、汗と埃にまみれて、会期の短い特別議会での無理な運動、一方では夏期講習会、講演会、専売局女工のストライキの交渉など、朝早くから夜電車のなくなる頃まで——そして時には出先で泊まるよりほかなくなるほど終日かけ歩いたのですから、もうへとへとに疲れてしまいました。……」

二人が和服を捨てて、洋装になったのもこの夏でした。まだ洋服を着る婦人のほとんど見かけられない時分でしたが、裾のからむ着物で、幅の広い帯をしめての真夏の活動はとてもたまったものではありません。……いつそ洋服にということに二人できめたものの、子供服なら縫える人はあっても、婦人服の縫える者は手近に見当たりません。……」（「元始、女性は大陽であつた——平塚らいてう自伝・完結篇」、参考文献⑥）

横浜や帝国ホテル横の婦人洋服屋はあまり高価につくので手が届きそうにもなかったが、さいわい、「アメリカ帰りの洋裁の先生」を紹介されて紺サージのスーツを新調、「働くにはまことに快適で、能率的」（同上）とばかりに人目を気にせず着ることにした。新婦人協会の機関誌『女性同盟』創刊号の「協会日誌抄」に「七月一日、平塚、今日から洋服を着る」とあり、市川は半月遅れて洋装になった。子供の洋服がようやく流行り出したばかりのころであつた。

日付まで明記されているこの事例ほど、個人史における和服から洋服への転換が明確に記録されている例も珍しいのではなからうか。いかに、それが当時先端的な行動であつたかの証左であらう。同時にそれは、洋服がさきの鹿鳴館風俗の貴顕淑女のものであつた「不便極まる」ヴィク

トリア朝様式を捨てて、新興アメリカ資本主義を象徴する「紺サージのスーツ」として社会的活動をことする女性の衣服となって日本の社会に新しく登場したことを意味する。まだ珍しがられて、平塚・市川の街頭写真が新聞紙面を飾ったりする状況ではあったが、確実に、この時、洋服は働く日本の女性の「仕事着」としての役割を担い始めたのだといえよう。

なお、らいてうの洋装採用に前後して、大正八（一九一九）年に東京市街自動車株式会社の子車掌が白衿制服を採用したことは画期的といわれるが、同年秋、神田青年会館で開かれた愛労会の婦人労働者大会参加の女性労働者たちは、まだ見渡す限り和装である（参考文献⑤）。

関東大震災が 画期となる

やがて、大正十二年関東大震災が起こり、その後の「帝都復興」によって、東京の街が近代的洋風化著しく生まれ変わった姿をほぼ現わした昭和初年、都市風俗は一変した。住居や生活様式の変化とともに、女性の洋装化にも拍車がかかった。職業分野への進出、社会的活動の拡がりといまわって女性の洋服姿は着実に増加していったのである。図1は、今和次郎による東京都心での通行人の服装調査「和洋服の比率」（参考文献⑤）第七章執筆の石山彰氏の引用による）の結果から、女性の場合の変化をグラフ化したものである。大正十四（一九二五）年の銀座通りでは洋服はわずか一%、九九%が和服であったものが、三年後の昭和三（一九二八）年の日本橋三越前調査では洋服一六%、和服八四%となり、さらに昭和八（一九三三）年の銀座では一九%対八一%となっている。そして昭和八年の調査は厳寒の二月であったが、もしこれが夏の季節であったなら、単服と呼ばれる夏の木綿ワンピース

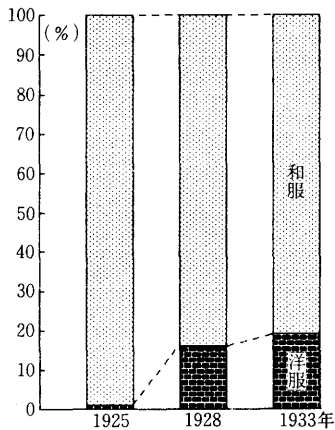
スが普及してきていた当時、もつと洋服の比率は高くなっていたかも知れない。なお、男性の場合、前二回の調査ではいずれも洋服が六七%、六一%と和服より多く、すでに男性の都会における服装は洋服が主流であったことを示している。

以後、モガ・モボ時代などを経て、都会の風俗はパリモードやハリウッド直輸入スタイルまでが華やかに登場し、急速に女性の洋装の実用化も進展する。文化裁縫女学校（一九二二年、文化服装学院の前身）やドレスメーカー女学院（一九二六年）が相次いで開校し、街の洋裁塾も出現し始めたのも、大正末から昭和初年のことである。昭和四（一九二九）年には、東京婦人子供服製造卸商組合も結成された。文化裁縫女学校で洋裁を学んだ若い女性たちは、昭和六（一九三二）年の卒業式ではそのまだ三分の二が和服姿であったが、五年後の昭和十一（一九三六）年の卒業式では大半が洋装となったという（参考文献⑤巻末の年表による）。

戦争の時代と衣服

昭和十年代以降は、昭和六（一九三二）年九月勃発の満洲事変に始まり、一九四五年の敗戦によって終わった、かの十五年戦争によって分断される。満洲事変の二年後、都市の核家族サラリーマン家庭に生まれた私は、赤ん坊時代から洋服で育つ

図1 街頭の和洋服比率の変化（女性）



(注) 1925, 33年は銀座, 1928年は日本橋

た。戦災をくぐり抜けてわずかに残る写真類がそれを証明する。学齢までは札幌にいたが、多くは既製品の子供服だった。普段着は姉のお下がりが多かったが、デパートにウールの洋服を新調に連れて行ってもらった嬉しい記憶もある。冬はセーターやスカートから手袋、帽子などの小物まで、英国製輸入毛糸や、国産のスキー印毛糸で母がせっせと編んでくれた。しかしまだ二十代だったはずの、その母の服装は、やはり家庭でも外出時も和服だった。それでも、父が教師をしていた女学校の生徒の制服は、もちろんすでにセーラー服だったし、札幌の短い夏には父の教え子でもあったろうか、洒落た絹のワンピース姿の若い女性が訪ねて来たこともあった。

一九四一年十二月のアジア太平洋戦争突入時にはすでに東京にいた。ファッションと物資不足による衣服統制の吹き荒れた戦時中については、いまでも記憶に鮮やかである。衣料品は配給制度となり入手は困難となった。男はカーキ色の国民服にゲートルを巻き、女たちは着物をほどこいて短い筒袖の上着とモンペに改造した。女学生の制服も、下半身はモンペに変わった。

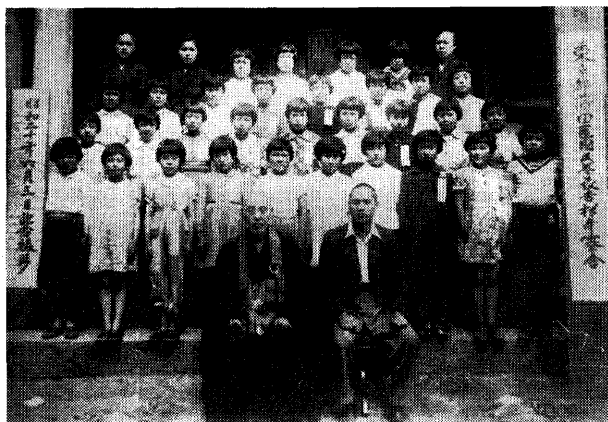
体験した都市

・農村格差

忘れ難い記憶として、ここに書きとどめておきたいのは、戦火を避けた疎開先の農村で、子供心にも初めて戦前段階における都市と農村の生活様式の著しい差異を知ったことである。一九四四年初夏、国民学校五年生の私縁故疎開した関東地方の一農村では、洋服を着ている子供はまだ皆無に近かった。一方、洋服しか着るものなかった都会からの「疎開っ子」は異分子としてことさら目立ち、地域の登校班を率いる年嵩のボス生徒のいじめの対象とならざるを得なかったのである。

出征兵士の留守宅の農作業に勤労奉仕に引率されて行ったある暑い日、草むしりをしていた私は、デシン地で鮮かな黄色に黒の水玉模様の、姉のお下がりのワンピースを着ていたが、突然、「そんなべべ着てるからノリーツが上がらねェんだべ！」という怒声を浴びせられ、大きな牛糞を肩先へぶつけられた。驚いて見上げると、黒っぽい縞模様の野良着にモンペの、高等科二年（今の中学二年）の女ボスの仁王立ちになって怒りに歪んだ顔があった。都会育ちの身に慣れない野外作業で能率が悪かったことはたしかだが、真面目にがんばっていたのに、きれいな服を着て浮かれている、と罵るボスの意地悪さ（とその時は思った）は、それまでの小さなじめの数々にも増して、骨身に徹してくやしかった。

しかし後年、繰り返しその記憶を辿るたびに、だんだんその光景が違った意味をもって理解でき



1945年6月、学童集団疎開先での記念撮影。服装はばらばらだが、皆一番よい服を着ている。東京の家は4月の空襲で灰となっていた。

るようになってきた。あのとき、彼女に発現したのは、一九四〇年代前半における都市の小市民生活の風俗と、派手な水玉模様洋服など触ったこともない地主小作制度の支配する農村の小作農の娘の生活格差への名状しがたい怒りであったのだろう。きつと、その時期、日本中のあちこちで同じような都市と農村の文化衝突が起こっていたにちがいない、と……。この事件後、私は東京に戻って八月から開始された学童集団疎開に参加することとし、遠い富山県に赴いた（写真参照）。

こうした衣服文化の地域格差は、こんにち一掃されている。少なくとも、子供たちの服装は都市も農村も何ら変わりが無い。戦後の農地改革を初めとする日本の社会諸変革の成果である。

洋装の大衆化と戦後

日本人の洋装が本格的に大衆化したのは、第二次大戦後である。戦後の焼跡時代、日本の若い女性たちはGHQの占領政策がもたらしたアメリカ文化風俗の強烈な影響のもとに、乏しい衣料資源をやりくりして装いをこらしはじめた。戦後間もないころ女子大に進学した姉のオーバーコートになったのは、かつて粉雪降りしきる札幌の冬の日、母がすっぽりと身を包んだチョコレート色の「角巻」であった。どういうわけか、この上等のウール地が、戦災を免れて焼け残っていたのである。その大型毛布を裁ち縫いして流行のスタイルで若い娘用のオーバーに仕立ててくれたのは、近所に満洲から引き揚げの身を寄せていた、夫は彼地で生死不明という中年の女性であったかと記憶している。そのころ、戦争で父や夫、あるいは兄や息子など一家の働き手を喪った女性たちが、ミシン一台を頼りに生き抜き、わが子は

じめ老親や弟妹までを扶養しとげた姿が、あちこちにみられた。

その後も、婦人服はオーダーが基本、という時代はかなり長く続き、アパレル産業がサイズやデザインの多様化と高級化で女性たちの需要を満たせるようになったのは、一九六〇年代の高度成長期以降のことといえよう。

図2は、一九五四（昭和二十九）年には全国に五万九千七百九十五軒であった織物・衣服・身の回り品小売業の店が、一九九〇（平成二）年にはその約四倍の二四万一千七百六軒にまで急速に増加している様子を総務庁統計局の事業所統計調査報告（参考文献(7)）から示したものである。もちろんこの数値には呉服その他の和装関係の店も入ってはいるが、急増したのはその大半が洋装関係の店であろう。また、この数字には含まれていない百貨店やスーパーマーケットの洋装関係売場の面積の拡大を考えてみれば、その消費市場の大きさが改めて実感できよう。

さらに図3には、その小売店で働く従業者の増加とその性別内訳を示してみた。総従業者数は一店平均四人弱であるが、ここで興味を惹くのは、女性従業者の数が男性よりも多く、しかもその傾向が一九八〇年代から急速に拡大していることである。概して小売業では女性の比率が高く全小売業平均でも一九九〇年に男四六・二四%対女五三・七六%であるが、衣服等小売業では男三四・七四%対女六五・二六%と平均を抜きんでている。これも女性消費者への衣服提供を主力商品とするこの業種の特徴を表わしている。わが家の近くにも女性店主が一人で経営するブティックがあるし、店長以下女性ばかりという戦略で規模拡大に成功した全国展開の有名チェーン店

図2 衣服等小売業事業所数の推移

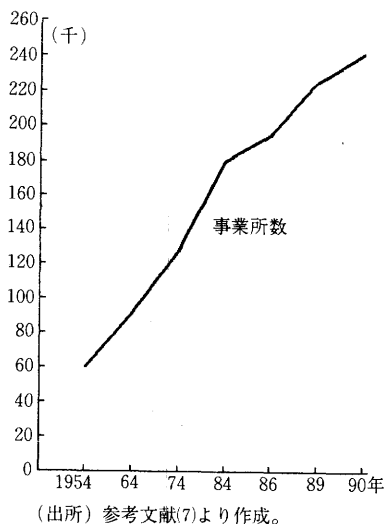
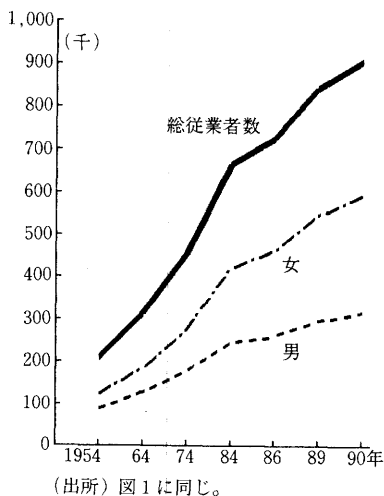


図3 衣服等小売業従業者数の推移



もある。けだし女性のファッション感覚が販売戦略に生かされ得る職場であるからといえよう。こうして、戦後の窮乏時代にはアメリカの奉仕団体から贈られてきたララ物資の古着を喜んで着ていたかつての敗戦国の日本の私たちは、いまや世界有数の衣料品消費国の国民となった。そして、老いも若きも洋装を中心とする時代である。私の母は一九八〇年代初めに七十四歳で亡くなったが、五十歳代までは和服だったにもかかわらず、その晩年は普段着もよそいきもずっと洋服で通した。洋服を着始めると、とても好きになったという。これは彼女だけでなく、多くの同世代の女性たちの辿ったコースであろう。現にいま、八十歳代の腰の曲がった老女の洋服姿は街で普通にみかけるところである。

大量消費の衣料

の末路は……

ところで、現在の日本では、ごく普通の家庭で一人平均年に一〇キログラムの衣料を購入するという。一九九二年十一月五日、NHKの朝のテレビ番組「くらしのジャーナル」の、「家庭の古着はどこへ行く」というテーマの放送で示された数字である。バブル景気の時代を経て、どの家庭でも蓄積された古着の始末に困っている、とこの番組は言う。では、古着はどこへ行くのか。若い女性への街頭インタビューでは、「着なくなったものは、袋に詰めて親に渡します。多分、お母さんが捨ててると思うけど……」「月平均五、六万円買うけど、サイズが合わないとか気に入らないと捨てます……」といった調子である。クリーニング店のおじさんの話では、「一日平均八〇〇着を扱いますが、開店以来とりに来ない品が三〇〇〇着も溜まっていますよ。なかには、ほれこのとおり、カシミアや百パーセントの新品もあります」という。

東京湾の中央防波堤に集まってくるゴミのうち、衣類が一日に七〇〇トンあるというの、確かな数字らしい。改めて古着の行く先をまとめてみると、①ゴミとともに捨てる \parallel 六六%、②贈与（誰かにあげる） \parallel 五%、③回収業者へ \parallel 一〇%、④雑巾などにする \parallel 一〇%、⑤その他 \parallel 九%、というのが、この番組で示された数字である。「捨てる」という比率の大きさに圧倒される。ほかの資料でも、不用衣料の処分方法として、ほかのゴミと一緒に出すのが七〇%、親類や知人に譲ったり回収業者に出すのが一%と、やはり同じような数値である（参考文献⑧）。

古着専門回収業者への取材によれば、回収先は主として自治体やリサイクルグループであり、

整理のうえ着られるものは東南アジア等の海外へメイドインジャパンとして輸出するそうである。災害被災地やアジア、アフリカ等の難民へ贈与するルートは人手や送料・倉庫料などに隘路があつて最近では詰まりがちであるともいわれている。古着専門店もあるが、扱ひ量は知れている。

なお、あの恐るべき戦中・戦後の欠乏時代を体験したいわゆる昭和一代生まれ以上の年齢層は、まだ傷んでいない衣類を捨てることがどうしても容易にできない。いつかは再生利用できる日があるのではないかと、はかない望みをかけてあたら狭い住宅の空間を古着の山で埋もれさせ、若い世代の憫笑を買っているのが、この悲しい高・老年層であることをもつけ加えておこう。

女性の日常着では ズボンが優勢

では、戦後世代の女性たちはファッションにふり回され、大量消費に明け暮れているばかりかといえ、それは一面的な見方になる。一方において、日常着の世界では、現代は歴史上かつてない機能的な服装を多くの女性が選びとつた時代である、と考えることができる。それは、女性の服装におけるズボンとミニスカートの定着である。

一九九二年十月初めの暑くも寒くもないある日、昼休みにアジア経済研究所近辺の、商店、住宅、小工場などの混在する新宿区の生活道路を歩いていた私は、そこから研究所へ帰りつくまでの一〇分間ほどの道すがら、出会う女性たちの服装を観察してみた。ポインツを置いたのは、その下半身がスカート（ワンピースを含む）か、ズボン（ジーンズ、パンツルック、キュロットを含む）か、ということである。合計六六人の女性を観察したその結果は、スカートが二人、ズボ

ンが四人であった。二対一で、ズボンのほうが多かったのである。

近年、一時の流行やファッションとしてでなく、女性のズボン着用がかなり定着していると感じていたからその路上調査だったが、数えてみるまでは、およそ半々と予想していたので、この結果にはやや驚いた。しかも、ズボン着用は、必ずしも若い年齢層（そのほとんどがジーンズ）ばかりではなく、中・高年の女性たちにも普遍的にみられた。この日を最初に、少し間を置いては定点観測を続けてみたが、程度の差はあれズボン優勢の傾向は一貫して変わらなかった。

そこで、次に全国的な傾向をみようとして、日曜日のNHKのど自慢の出場者を観察することにした。この素人「のど自慢」は、テレビ時代の初期こそ精一杯着飾つての出演も多かったが、いまではごく普段着スタイルの出場者が一般となっていると認識していたからである。初回は、一九九二年十月二十五日、長野県松本市で開催の放送である。全部で二五組の出場者のうち、女性は一七人。その内訳は、ズボン八人（四七％）、スカート六人（三五％）、和服三人（一八％）と、やはりズボンが多数であった。その後も六回ほど同番組の観察を続けたが、一、二の例外を除いて同じ傾向であり、日常着におけるズボン優勢は全国的に広がっていることがみてとれた。

そして文献によれば、すでに一九六〇年の時点で全国既製服消費量調査では数量・金額ともにズボンがスカートを上回っているという（村上信彦『服装の歴史』、参考文献(9)）。

なお、おもしろいことに、さきの新宿区路上調査の初日、意外な結果に驚いて、帰りついた職場の研究所内で、ひそかに同僚女性たちの服装を観察したところ、出会えた限りにおいてスカ―

トが圧倒的に優勢であつた。アジア經濟研究所の女子職員は服装においてやや保守的といえるかも知れないし、また生活道路の通行人（商店の店先で働いていた女性を含む）とオフィスの中の女性の服装にはTPOにおいて若干の差があるともいえそうである。現に、その日の筆者自身、スカート着用であつたが、休日に自宅や生活圏での外出ではほとんどズボンを着用している。

その傍証を、再びNHKの朝のテレビ小説「ひらり」（九三年二月現在放映中）にみよう。すなわち、登場人物である若い姉妹は、姉のみのが都心の大企業のオフィスの勤めのいわゆるOL、妹のひらりは地元・両国の相撲部屋を中心に生活圏で活躍しているという設定である。そして、その服装をみると、みのがと仲良しの同僚たちは常に単色のスーツ（もちろんスカート）着用、ひらりは常にセーターやシャツにジーンズ姿と、際立つた対照をみせている。これは、やはり女性社員に保守的な女らしい服装を要求する大企業と、下町の生活圏の活動の場とのTPOの差が服装の差、延いては生活感覚の差にまでなっているのだといえそうである。

洋装は日本人の 生活の思想となつた

ここに再確認する。夏はTシャツにジーンズ、冬はセーターやブルゾン、アノラックにジーンズという男も女もほとんど見分けがつかないほど似通つた普段着のスタイルは、二十歳前後の学生層を先駆として、一九七〇年には、機能性とともに世界的な革新のイメージが重ねられて七〇年代初頭の日本の若者たちが選びとつたものであつた。それが大学のキャンパスから街へ出て風俗化しただけでなく、導入後二

十数年を経て日常の生活にすっかりと根をおろしたことを見届けたように思う。

いまひとつ、初めイギリスから広がった世界的流行として一九六〇年代後半から爆発的隆盛を見、やがて終焉したミニスカートのが、日本で数年前から静かに復活し、現在では再び二十代前後の女性の普段着として日常的に定着していることにも注目したい。とくに中・高校の学校の管理主義と密着する窮屈な制服から脱したばかりの女子学生の服装は、ジーンズにあらずんばミニ、と言つても過言ではない。もう私の世代ではミニを着用すべくもないが、六〇年代末のころ着たことのある実感では、これまたそのすがすがしい機能性が、精神的にも大きな解放感をもたらすものであったことが想起される。

そしてもう一度、前章までの途上国の日常着のあり方と比べ合わせて、いかなる民族衣装もその風土と歴史とのかかわりにおいてのみ生き残りあるいは衰退していることを考えてみよう。百年前、日本の女性たちは上からの服制改革には容易になじもうとしなかった。彼女たちの現実の生活と遊離した洋装は、生活そのものが受け付けようとしなかったのである。しかし、男性に遅れること半世紀、現代の女性たちは、かつてない豊かな時代の恩恵を衣生活の面でも享受して多様なお洒落を楽しむ一方、その社会進出と意識変革に根ざした簡素で機能的な日常着としてズボンやミニスカートを身につけて颯爽と街を行く。まだ社会的規範性の強い側面をドブネズミ色の背広にひきずつている男たち以上に、彼女たちの洋装はしつくりと周囲の風景に溶け込んでいる。その姿に象徴されるものは、日本人が洋装をもはや借り物でない自分たち自身の生活の思想その

ものとして獲得しおさせたということであるといえよう。

〔参考文献〕

- (1) 『日本洋服史』、洋服業界記者クラブ「日本洋服史刊行委員会」刊、一九七六年。
- (2) 山川菊栄『おんな二代の記』、平凡社、東洋文庫二〇三、一九七二年。
- (3) クララ・ホイットニー著・一又民子訳『クララの明治日記』、講談社、一九七六年。
- (4) 二葉亭四迷『浮雲』、一八八七年（岩波文庫一九四一年版）。
- (5) 遠藤武・石山彰『写真にみる日本洋装史』、文化出版局、一九八〇年。
- (6) 平塚らいてう『元始、女性は太陽であった——平塚らいてう自伝・完結編』、一九七三年。
- (7) 総務庁統計局『平成三年事業所統計調査報告』第一巻・全国編その1、一九九一年。
- (8) 監修・北出修平、制作スタッフ編『アンケート・データブック「最新版」』、日本能率協会
マネジメントセンター、一九九二年。
- (9) 村上信彦『服装の歴史』第四卷、理論社、一九八七年。

(おおいわかわ ふたば／アジア経済研究所広報部主幹)